

宇都宮市宮山田町における里地里山の食用植物の利用実態とその変遷 Transition of Food Plants Use on Satoyama in Miyayamada-cho, Utsunomiya

○吉田直樹* 守山拓弥* 田村孝浩*

Naoki YOSHIDA, Takumi MORIYAMA, Takahiro TAMURA

1.研究背景 里地里山は人々が持続的に利用してきた農地や森林など、人間活動の影響を受けて形成される二次的自然環境とされる。一般に江戸時代から昭和30年頃は循環型社会が成立し、生物資源の持続的利用が行われていたとされている¹⁾。一方、昭和30年以降、エネルギー革命による薪炭需要の低下、高度経済成長期に伴う拡大造林により広葉樹林からスギ・ヒノキ林への転換が広い範囲で行われ里地里山の環境と生活は変化した。既往研究では昭和30年頃までは農用林の循環利用が行われ、昭和35年以降に循環利用が衰退していることが明らかにされた。その要因として農業の機械化、化学肥料の導入などに伴う農用林の管理放棄や戦後の造林によるスギ・ヒノキ林の拡大が挙げられている²⁾。しかし、調査対象を薪炭材などの生活資源、飼料用、肥料用の農業用資源としており、食資源にはほとんど触れていない。食資源の研究として植物を調査対象とした小島ら(2010)があるが、1)林業家所有敷地内での調査のため普遍化、体系化が必要としている³⁾。また、過去の里地里山での食資源利用を明らかにすることで文化の継承、地域活性化につなぐことができると考えられる。そこで本研究では里地里山における食資源の利用に着目する。

2.研究目的 本研究では里地里山を食資源調達場として捉え、昭和30年頃と現在の里地里山から得られる食用植物の利用実態とその変遷を明らかにすることを目的とする。仮説として、里地里山の環境変化に由来する食用植物の利用の変化が推察される。また、現在も残っている食用植物においても生活の変化に由来した利用の変化が考えられる。この両面から考察し里地里山での食用植物の利用とその変遷及び変遷要因を明らかにする。

3.研究方法 本研究の流れを Fig.1 に示す。調査対象地は中山間地域の農村集落である宇都宮市宮山田町とした。調査方法は聞き取り調査(集合調査)とし、対象地で昭和30年頃の生活を経験している6名を対象とした。聞き取り調査の内容は、1)農業・生活の変化、2)里地里山の環境変化、3)昭和30年頃と現在における里地里山から得られる食用植物の採取状況とした。聞き取り調査では食用植物をリス

トアップした写真図鑑を作成し用いることで、種名の確定と利用状況の把握を行った。

4.結果・考察 1)農業・生活の変化：昭和30年頃は日常的に薪炭材や農業用資源の採取が行われていた。昭和40年頃には農作業機械や化学肥料が普及し、農業用資源の採取は行われなくなっていった。

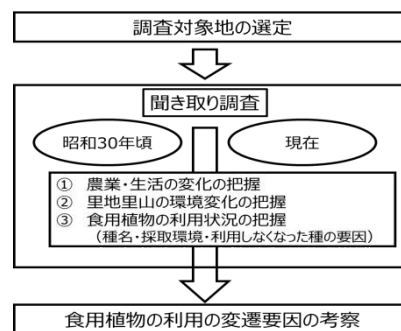


Fig.1 研究の流れ

Tab.1 環境変化、農業・生活変化年表

年代	変化要因
昭和30年頃	広葉樹林での日常的な下草刈り、落葉採集、薪の確保
昭和35年頃	マツ枯れによるマツの伐採
昭和35年～昭和40年	拡大造林(広葉樹林→スギ・ヒノキ林)
昭和40年頃	農作業機械、化学肥料の普及
昭和40年頃	ガスの普及
昭和45年～昭和50年	北部にゴルフ場建設
現在	土地所有者の高齢化・不在により管理不足

これと同時期にガスが普及し、薪炭材の採取も行われなくなった(Tab.1)。

2)里地里山の環境変化:昭和30年頃は森林の大部分が広葉樹林で構成されていた。その他に、沢筋、境界線沿いにスギ・ヒノキ林、一部にアカマツ林などで森林が構成されていた。昭和35年頃から昭和40年頃に拡大造林により広葉樹林の大部分がスギ・ヒノキ林に転換されている。また、対象地北部に存在していたアカマツ林はマツ枯れ、ゴルフ場の建設により現在は消失している(Tab.1)。**3)食用植物の利用状況:**昭和30年頃の食用植物の採取として山菜・野草36種、果実15種、キノコ類20種を確認した。現在も採取される種は山菜26種、果実11種、キノコ類4種であった。採取環境は広葉樹林、スギ・ヒノキ林、屋敷周り、畦畔など8つが挙げられた。昭和30年頃と現在で採取した種数を採取環境別に比較し、特徴が見られた項目の考察を行う(Fig.2)。

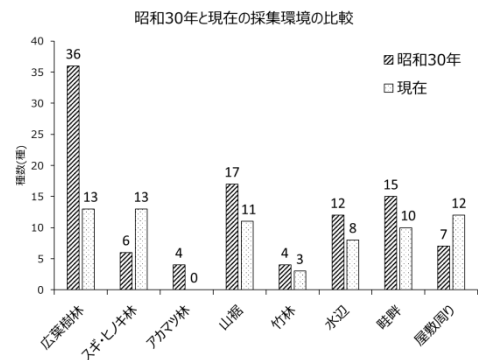


Fig. 2 各採取環境における採取数の変化

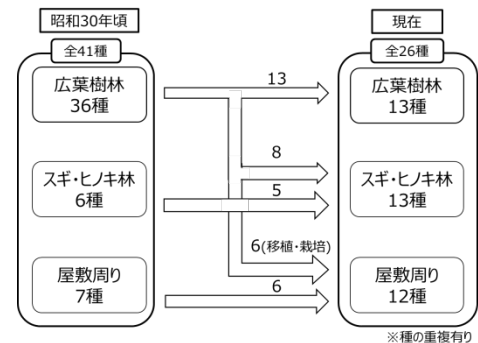


Fig. 3 3 環境下での採取種数の変遷

i) 広葉樹林とスギ・ヒノキ林での採取の変遷:

昭和30年頃に広葉樹林で採取された36種の内、現在はスギ・ヒノキ林で採取される種が8種確認された。また、昭和30年頃は広葉樹林で採取されたが現在は採取されていない種が14種確認された(Fig.3)。これらの変化の要因として環境変化が大きいと考えられる。具体的には拡大造林に伴い広葉樹林の大部分がスギ・ヒノキ林に変化したこと、農業・生活資源の採取の減少により低木類が生育したことである。以上より身近な採取環境が広葉樹林からスギ・ヒノキ林に変化したことや、食用植物(特にキノコ類)の生育、発見が困難な状態になったことが考察される。その結果、採取環境の変化、採取種数の減少が生じたと考えられる。

ii) 屋敷周りへ移植された種: 広葉樹林から屋敷周りに移植された種が6種確認された(Fig.3)。現在は農業・生活資源の採取が行われなくなり森林へ足を運び食用植物を採取する頻度が減少した。その中でも利用価値が高く移植が可能な種を身近な屋敷周りへ移植し採取していると考察される。

iii) 採取しなくなった種の要因: 昭和30年頃と現在を比較し採取されなくなった種が30種確認された。現在発見が困難である種が22種、生育はしているが採取していない種が8種確認された。採取しない要因として8種の内、7種で食生活の変化によるという回答を得た。食の多様化や食料入手が容易になったことから利用価値が低下したと考えられる。

5.おわりに 本研究により、昭和30年頃と現在での里地里山において利用される食用植物を明らかにすることができた。また、食用植物の利用の変遷要因として拡大造林による環境変化と高度経済成長などによる生活の変化が大きいことが確認できた。今後は他地区でのデータを蓄積するとともに比較検討による普遍化、体系化を行う必要がある。

引用文献: 1)守山弘(1998): 自然を守るとはどういうことか、農村漁村文化協会

2)志賀壮史ら(1998): 山間集落における農林地管理の変遷と景観変化に関する研究、ランドスケープ研究 61(5)

3)小島仁志ら (2010): 農村において食用利用される野生植物との関係に関する研究—栃木県馬頭地区を事例に—、農村計画学会誌 29 巻論文特集号